

生業（なりわい）の里

新潟県村上市の山熊田集落に、「生業（なりわい）の里」という企業組合があります。60歳代（推定です）のお母さんたちが、10年くらい前に起こされました。

山熊田は、村上の街から車で90分ほど。平成の大合併までは、岩船郡山北町山熊田。隣の集落と9km以上離れ、朝日連峰に抱かれた集落。戸数は41戸。そのうち、現在も人が



中嶋哲夫の

「人事も歩けば」



が住むのは21戸。流行のことばでは「限界集落」となるのでしょうか。小学校が統合されるまでは除雪がされず、冬には陸の孤島となる集落。地名の山熊田も地域で多い順に並べたとか。マタギが住み、焼畑で赤カブを作り、シナ布（シナの木の樹皮の繊維を織った織物）を織り、アク笹巻き（米を三角形にまとめ、笹を巻いて灰で煮た保存食。鹿児島県と山北地方にのみ現存）を作る。移動販売車で生活物資を購入しながら、かつての山の暮らしを維持しています。

フランスの「農と薬のフェスティバル」に参加されたのが起業のきっかけ。「おらたちも何かやりたい」。5人のお母さんが100万円ずつを出資、同時に、賛同者からも出資を請い、借金もして2,500万円の資金で起業されました。空き家を買取り、活動を開始。



（左は筆者）

起業後3年目に、仕事先のお客さんに案内され、お母さんたちと出会いました。熊皮が掛かった古民家の囲炉裏部屋。昼食をいただきましたが、声を出せないほどのショックでした。成功する理由がひとつも見つからない場所での起業。ほかの人が引退しようという時期に起業をするお母さん方。囲炉裏部屋に神殿のような厳粛さを感じました。

それ以来、生業の里を年に1回は訪ねています。そこは、筆者の知らないことだらけ。木灰でアクを抜く技術。水にさらしてアルカロイドを除去する技術。口開けの習慣（収穫日を一定に制限）。ゴミを下流に流さない厳しい掟。訪問するたびに新しい知識を得ます。今回は糸車を使ってシナの糸に撚りをかける作業を教えていただきました。呼吸と作業のリズムを合わせるのに苦勞をしましたが、呼吸ということばにコツとか頃合いという意味があるのを思い出しました。

普通のお母さんが淡々と仕事を進める姿に折れないエネルギーを感じます。

（MBO実践支援センター代表）